

ベトナムの養蜂事情 調査に同行して

深江 義忠

ODA 関連事業の一環として、養蜂に関する技術協力の可能性を調査するために、1995年2月12日～22日の11日間ベトナムを訪問した。

調査団は、玉川大学の松香教授を団長として畜産技術協会の清水事務局長と筆者の3名である。調査の詳しい内容については、後日報告されるので、ここではベトナム旅行日記の紹介のみとする。関西空港を12日14時05分に飛び立ち、タンソンニャット空港に着いたのは、現地時間で17時40分、空港では養蜂研究開発センター (BRDC) のタム所長と通訳のハン女史のほか2名が出迎えにきてくれていた。

ホーチミンは、ベトナム最大の商業都市と言われるだけあって街は活気に満ちている。道路には、バイク、自転車、輪タクが道いっぱいになって走っている中を、私たちを乗せたタクシーが、クラクションをバンバン鳴らしながら追い越していくのにはいささか驚かされた。ホーチミンでは、Bienhoa の Honey Bee Company、蜂蜜処理工場、Thuduc 農林大学を訪問した。また、Xuanloc では広大なゴム園を蜜源として、セイヨウミツバチ 500 群を飼育している蜂場と、北部からトウヨウミツバチ 400 群を持ってきている蜂場を見たが、いずれも蜂の状態はよいように見受けられた。また、蜂が実に穏和で巣箱の中を見せてくれるのに、燻煙器も面布も使用しないのには感心した。もう1か所の、南からトウヨウミツバチ 100 群を持ってきている蜂場では、サックブルードの被害で 60 群を失ったという。ホーチミンでの最後の日、ベトナム戦争で開放軍抵抗の拠点となった Cuchi の地下道や市内名所の観光を楽しんだ。

16日はハノイへ移動。ハノイは、古くからの



図1 養蜂研究開発センター訪問 (上)
同センターの育種場 (下)

首都で、湖と街路樹の美しい街であるが、道路はバイクと自転車が溢れ混雑している。この日は、14時から農業食糧産業大臣に謁見、大臣は山間地帯の養蜂技術水準はまだ低いので、力を貸してほしいと熱心に語られ、養蜂の定着を重要視されていることが感じられた。17日は Bacson 地方の家族養蜂3戸を見学、規模も小さく技術的に改善すべきことが多いようであった。

18日は、Hoabinh で実施されている育種事業を見学、BRDC により1989年から始められたこの事業で蜂の能力が向上し、種蜂の販売が開始されている。セイヨウミツバチについては、1960年以降新たな種蜂の導入はなく女王蜂の産卵能力が低下しているという。20日には BRDC で総括的な討議を行い、21日は日本大使館とハノイ大学を表敬訪問し大方の日程を終了した。この間、ベトナム最大の仏教聖地への小旅行、文廟、ホーチミン廟を参観し、民族芸能も楽しんだ。

22日朝ハノイを発ち帰路についたが、多くの人々に温かい歓迎と熱心な案内を受けた。特に、タム所長とハン女史には、終始お付き合いをいただいた。心からお礼を申し上げたい。

(〒818 筑紫野市大字吉木 587

福岡県農業総合試験場)